

女性と修養

一、口と修養

女性は男性よりも言葉が概して多いようであり、一体言葉が少いものがおり、言葉の多いものがあり、中位のものもあるので、よくつりあつて面白いと思います。もし世の中に同じような者がそろつていたら面白くはないのでありますが、それぞれに變つてゐる所に面白があります。要は唯それを生かすかどうかと云うことが問題であります。ですから女性だとして、皆が言葉が多いということではない。中にはだまり屋もいるのですけれど、一体に女子はよくしゃべります。しゃべつてもいいから、その中に何が流れてゐるかが問題であります。

「口は禍の門」と言います。人の肺腑をえぐるようなとげのある言葉を出して、相手の短所をつくのは女性に多いようであります。先日何かの書物の中に世の中の悪党がありました。一体悪党は、相手の長所をぐつと握ります。そしてその人の過去の痛手をつかみます。

長所をにぎるのは、褒めあげられたら誰でも得意になるといふ人の性質につけこんで、褒めあげて御機嫌をとるためであります。ほめて御機嫌をとつて、相手を有頂天にしておいて、今度は相手の痛手にちよこくさわるのです。そうして相手から金でも取りあげるので、随分考えたやりかたです。

相手の痛手にさわることは、小人のして見たいことでもあります。それは心の寛いやりかたではありません。しかし人には、相手の痛手にふれて相手を苦しめることを痛く快に思う卑しい心があります。女性にはかなりこうした心の濃い人が多いようですから注意しなければなりません。相手のそうしなければならなかつた境遇も知らずに、古傷にさわることは、どれほど人の心を殺すか知れないのであります。

仏も十悪の中に、多弁をかぞえてはいませぬ。多弁は必ずしも悪ではありません。もちろん、言葉の少いには越したことはありません。

人の心をさす毒舌を悪口と言います。悪口ほどその人の価値を下げるものはありません。悪口は相手を下げたり上げたりする力はありません。唯言つた者の価値は必ず下ります。

如何に人々の口から責任のない悪口が出ることだらう。

もしその悪口が牛分に減じたら、三分の一、十分の一に減じたら、如何にこの世界が住みよくなるだらうか。

卑怯な者は、表では綺語かざりごとを言つて裏で悪口を言います。向つて言えない位であるならば、裏でも言わないことです。

我が言う言葉に注意しよう。何が出てゐるか。

口は我等の心を表わす唯一の機関です。

頭の中に何かあるかわからない。

胸の中に何が秘めてあるかわからない。

それが口から出る。

あなたの美しい口から菩薩のような言葉が出ると、

其の言葉が聞いている人の心を明るくする。

その小さい口が、何に使われる。

悪魔の使いか。

仏のかおりか。

天上からながれ出た言葉でないなら、だまっていた方がいい。

その言葉の裏に何ほどの権威がある。

絶対界に根ざさぬ言葉なら、千言万語を費しても何にもならぬ。

生きた一言なら、時に世界の人心の中にひびきこむ。

そうしてそれが人類の永久の目標となり、

豊かな心の糧となる。

朝から晩まで、おゝ、その口が一体何に使われる。

剣のような毒舌が、嫁の心に致命傷を与える。

爆裂弾のような野卑な罵倒が、子供の一生を永久に葬る。

何でもないような一言、それがそれはど大きな力をもっているのか。

嫁の悪口を隣の人たちに言っている姑がある。

この人に嫁をやらねばよかつたと思う。

女子はその大部分が、言葉をかざる。

「巧言令色、鮮し仁矣」。

しかし美しい人の心を生かすような生きた言葉と、綺語とは、永遠にその本質を異にする。

2

舌の根に美しい愛情がおどる。それが美しい言葉となる。

一口聞いても誠意がわかる。

聞いた人がよろこぶ。その心から明るい世界が開いて来る。

心にわだかまりがなかつたら、その言葉にもわだかまりがない。

一寸は飾つてもそれが通る。しかし少ししたてば、その裏が見える。裏が見えたら飾りだけが嫌になる。

二、嫉妬心

嫉妬は女性のもっているわるい心である。

夫を嫉妬する妻の心は、我と我が心を燃やしつくす炎である。

相手が成功すれば嫉妬する。隣が富めば嫉妬する。友人が栄えたら嫉妬する。

卑しい心である。

一度この心がきざす時、一切善根功德をつきやぶって地獄の底におちてしまう。

寛かな心になりたい。嫉妬の心の微塵もない、ひろい心の持主になりたい。

女子と小人は度しがたしという。

隣の田の稲の出来を見ても腹が立つ、

お友達の半襟を見てさえ、淋しく思う。

堂々たる男子でも、一度この心に囚われた時、彼は卑しい小人である。

早くつみとれ、嫉妬の心。

あなたの心の平和を奪う最大悪魔。

一切の善の根を亡ぼすバチルスである。

嫉妬する時に限って、相手だけが悪く見える。

早くつみとれ、この心。

早く消せ、嫉妬の炎。

もし消し得なければ、この心をいだいて求道せよ。

あゝ過去の聖者、この心を抱いて泣いた人ありやなしや。

三、狭い心

大きな心の前には大きな世界が開かれる。

小さい心の前にはせまい牢屋のような世界があらわれる。

一切をゆるす心、

一切をいだく心、

その心の前にだけ悪人も生きられ、弱い者も生きられる。

太陽の前に万物が輝くように、寛やかな静かな心の前に、人々の心は、ゆるやかに

ゆたかに、平和にほほえむ。

子供がちよつと過失する。口やかましく叱りつける。

夜あそびに出て少しおそくかえる。遊蕩児にでもなつたようにきびしく言う、

嫁が茶碗一つこわすと、目にかどをつけて小言を言う。

自分の住む世界が狭いのは、決して周囲の者が狭くするのではない。自分自身が造るのだ。

一日か二日か一緒にいたら、その人の住む世界の大きさがわかる。

一人の老婦人がありました。その方が腹を立てたのを見たことがない。何時もに

こにこして態度も言葉もおおらかである。子供が世間から非難されるとその婦人は、

「心配しなさんな、その内には、ほんとのことが皆にわかる。」

と言ったきりで、どんなことが起つても老女の世界をさまたげない。

其の子供が本当に遊蕩におちた時、静かに注意はしたが、責めはしない。

世間の人が、この子の悪評を聞かせても、「はい有難う御座います。」とそれだけである。

「この位のごとは世間にはありがちなことだ、何も心配することはない。」

この婦人の前を何物も碍げない。言つてもよい時が来た時に、やめよと言わずに道を

教えます。大きな心だとて、とりはなして放つていいるのではありません。大きな愛ほ

ど細心である。が、条件が少ない。こうして婦人の道がふさがらぬように、やがて

は、この周囲がだんだんのびのびと育つて来ました。

女の心は大概せまい。

愛があつても慈悲がない。

熱情があつても智慧がない。

ひろい心を持たないならば、その熱い愛だつて人を殺す。

狭い心は苦しみを生む。

狭い心を「囚^{とらわれ}」と言う。何についてせまくても「囚われ」である。見て字の如く、「囚」の字は、□の中に人が入れている。心がせまい、かこひに入れられる。□が小さいほど心が苦しい。この□を別の名でよべば、我と言うのだ。

我が私を苦しめる。我以外に私を苦しめる何物もない。